

2014年度FDワークショップ(授業見学)開催報告

立教ファーストタームプログラムのスタートを視野に入れ、今年度も初年次演習科目を対象としたワークショップを開催しました。

経済学部「基礎ゼミナール1」

第1回「学生の学びをどうリードするか

— 初年次演習における課題と工夫 —

[6/3(火)]

飯島寛之准教授(同学部会計ファイナンス学科)が担当する経済学部「基礎ゼミナール1」を対象に、計2回の連続ワークショップを開催しました。第1回では、4月中旬に収録した授業映像の視聴を通して、入学当初の学生たちの様子を共有し、初年次演習の課題について全員でディスカッションを行いました。教員・仲間・大学・学部・専門分野のすべてに対して初対面である学生たちの関係構築をいかに促すか、参加者からも色々な意見が出され、活発かつ和やかなワークショップになりました。



第1回の様子 奥右から3人目が飯島寛之先生

第2回「批判的思考力を養うグループ討論型授業

— 経済学部「基礎ゼミナール1」の取組み —

[6/5(木)]

第1回ワークショップでみた映像ではぎこちない様子で話していた学生たちでしたが、この日はしっかりとしたレジュメを用意し、懸命に発表・討論を行っていました。意見交換会では、知識量を期待できない初年次学生に、討論を通じて何を掴み取ってもらうのかという点が話し合われ、議論の対立点を見出す、相手の発言の要点を的確に掴む、といった基礎的な能力を養うことの重要性和難しさが、改めて浮き彫りになりました。



第2回の授業見学(経済学部)の様子

コミュニティ福祉学部「基礎演習」

「アカデミック・スキルと問題意識を培うコースデザイン

— コミュニティ福祉学部「基礎演習」の取組み —

[7/2(水)]

この科目はコミュニティ福祉学部の必修科目です。見学させて頂いた柴崎祐美助教(同学部福祉学科)のクラスでは、情報検索、情報の分析と加工、口頭発表、レポート執筆等のスキルを、8回分の授業を積み上げて獲得させることを目指しています。当日は、社会問題をテーマとした3グループの発表とそれに対するフィードバック等を見学することができました。要点がシンプルにまとまった発表スライドや、堂々とした発表の様子から、これまでの授業の効果をうかがうことができました。それでも柴崎先生は、使われている資料の不足や、発表の構成における問題点などを簡潔かつ分かりやすく指摘なさっていました。打ち解けた雰囲気と同時に、授業開始前から感じられた学生たちの授業への前向きな姿勢がとても印象的でした。



授業見学(コミュニティ福祉学部)の様子 奥中央が柴崎祐美先生

上記のワークショップの詳細は、2014年10月に刊行する大学教育開発研究シリーズNo.21『アクティブな学びをデザインするvol.4』をご覧ください。 学術調査員 谷村英洋

Rikkyo Education

今回は、大学教育開発・支援センターの「教学IR部会」の活動について取り上げます。センター長であり教学IR部会の部会長でもある原田久教授にお話を伺いました。

IRとはInstitutional Researchの略語で、「機関研究」「大学機関研究」と訳されます。個々の大学の中にある様々な情報を収集し、数値化・可視化し、その分析結果を教育・研究、学生支援、経営等に活用することを目的とする活動を指します。近年は、国・公・私を問わず多くの大学で専門の部署を設けるようになりました。

本学では、2012年10月に、大学教育開発・支援センターの中に「教学IR部会」を新設し、学生の学修行動を把握するアンケートなどを実施し、教育効果の検証に取り組んでいます。

エビデンスに基づく (evidence-based) 教学改革

大学教育開発・支援センター長
法学部教授 原田 久

1. 教学IR部会が行っている主な活動についてご紹介ください。

原田: 現在力を入れて行っているのは、学生の学修状況や学生生活に関するアンケート調査です。2011年度入学者を対象に、入学時・2年次・3年次に、学びの過程を継続的に観察し記録・分析するためのパネルデータを収集しました。これにより、比較分析が可能となりました。

さらには、修得単位数などのデータと突き合わせて分析を行い、学修行動が学修成果にどうつながっているのかを把握することにも取り組んでいます。

ほかには、「教学IR部会」設置以前の2007年度から継続的に行っている卒業時アンケートがあります。こちらは、本学のディプロマ・ポリシーに対応する学修成果の達成度を把握しようとするものです。

2. 教学IR部会長として、調査を通じて目指されているのはどんなことですか。

原田: 立教大学の教育を改善していくために、客観的なデータに基づいてその現状を分析することです。

従来、カリキュラム改革論議は、とすれば経験と直感によるものになりがちでした。それを、証拠と論証に基づくものへと転換させたいと考えました。エビデンスに基づく (evidence-based) 教学改革を先導し、支援することを目指しています。

3. 調査結果の学内へのフィードバックはどのように行われていますか。

原田: 教育改革推進会議を通じて学内の各部局に報告しています。学部・学科別のほか入試種別などでクロス集計を行い、項目間の相関関係や因果関係についても報告しています。

教育改革推進会議で行った報告資料は、部長会メンバーによって保管されていますので、専任教職員はそれぞれの部局で見ることができます。また、当センターにお越しいただいてご覧いただくことも可能です。

[集計・分析結果の報告回 (2013年4月～2014年5月)]

2013年度: 第1回 (4月18日)、第2回 (5月23日)、
第7回 (12月19日)、第9回 (1月23日)

2014年度: 第3回 (6月19日)



原田久教授

4. 3月に学内報告会を開催されたそうですが、 どのような内容だったのでしょうか。

原田: 調査の分析から得られた知見を、学内でより深く共有するとともに、「学士課程統合カリキュラム」(仮称、2016年度から実施)における各学部等のカリキュラム設計の際の参考資料としてもらうため、3月10日に池袋キャンパス太刀川記念館に於いて学内報告会を開催しました。「大学への『着地』と学修成果」というタイトルのもと、「2年次生 学習・学生生活アンケート」の分析結果を中心に、1年次終了時点での「大学の勉強でついた力」、「価値観や行動指針」、「学ぶことへの積極性」、「大学での居場所感」などについて報告しました。

当日は、新座キャンパスへの中継を行いました。多くの教職員にご参加いただき、活発なディスカッションが行われました。この場を借りてお礼申し上げます。



学内報告会(池袋会場)の様子

5. 現在、新たな調査体系の構築を行っている 伺いました。詳しく教えてください。

原田: 2016年度から実施される学士課程統合カリキュラム(仮称)における、学修成果の達成状況を検証するための新たな調査体系の構築を進めています。学士課程統合カリキュラムでは、入学から卒業までの間を「導入期」「形成期」「完成期」の3期に分け、それぞれに学修成果を設定します。各期の終了時点で学生向けの調査を行い、得られたデータを教務データ等も用いて網羅的に分析しようとするものです。

新たな調査はWeb上で実施します。将来的には、学生自身による振り返りと合理的な履修行動を促すために、過去の自身の回答内容もWeb上で閲覧可能にする予定です。



学内報告会(新座会場)の様子

新規刊行 Master of Presentation Vol.2

2014年5月にMaster of Presentation Vol.2 <リハーサルから当日まで>を新規に発行しました。Vol.1<スタートから資料作成まで>に引き続き、立教大学の学生向けに、授業で行うプレゼンテーションの準備のポイントについて解説していますので、ぜひ、ご活用ください。

※Master of Presentation Vol.1 <スタートから資料作成まで>も中身を一部見直し、改訂版を発行しました。

目次	リハーサルをしよう!	7. 直前チェックポイント
	5-1. 発表用メモを作成しよう	8-1. 積極的に聴こう
	5-2. 発表用メモの例	8-2. よい質問をしよう
	6-1. 論理展開を意識した表現を使う	
	6-2. 声・目線・身振りに気を配ろう	付録. ポスター発表のポイント

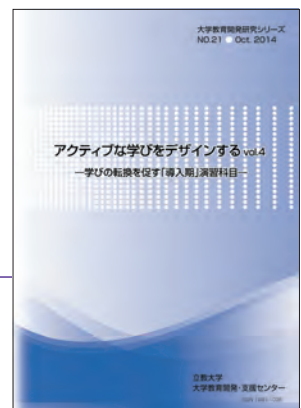
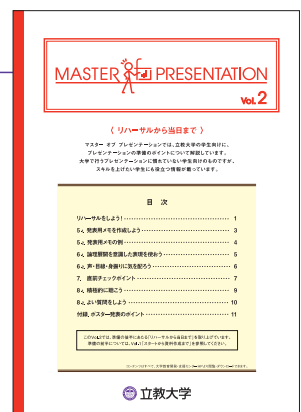
授業でのご利用にあたって

Vol.1、2ともに、本学の授業での使用をご希望の先生は、当センターまでご連絡ください。必要部数をお届けします。また、下記のURLから全ページをダウンロードすることもできます。

http://www.rikkyo.ac.jp/aboutus/philosophy/activism/CDSHE/journal/leaflet_presentation/

近日刊行 アクティブな学びをデザインするVol.4 —学びの転換を促す「導入期」演習科目—

今号冒頭で報告した2014年度FDワークショップ(授業見学)の記録冊子を大学教育開発研究シリーズNo.21として、2014年10月に刊行いたします。本冊子では、見学当日の授業構成や関連資料、意見交換会での議論などを収録しています。初年次生がどのようにアカデミック・スキルや専門基礎知識を学んでいるか、ぜひ、ご一読ください。



紫縁談義

学問イメージの転換の難しさ、 数学の場合

大学(の理系)での数学教育では、高校までの数学との違いが強調される。要するに、ただの計算ではなく、なぜそれで正しいのか証明を与え、理論を構成することが大事になるということである。高校数学からのこの切り替えがかなりハードルの高いものであることは昔から十分認識されているが、その困難がますます大きくなってきていると感ぜられる。最近定年になられた同僚の先生が、学生に「証明はもう止めてください」と言われたという話を披露していたのだけれども、いかにもありそうな話と(極々一部の大学を除いて)大学で教えている数学者なら誰もが受け止めるだろう。

入学してくる学生たちが持っている数学イメージは、どうやら、「数や記号の意味を抜きにした一連の形式的操作によって、解答となる数・記号を導出すること」のようである。高校数学の頂点である微分・積分について、現行の教育では微分・積分の発祥の地である物理学と完全に切り離されていることも、このような数学イメージが形成される一つの大きな要因である。だが、試験で点を取るためには「答えが出てなんぼ」であり、むしろ意味を抜きにした形式的操作の修練が効率的であるという考え方が、より重大な要因だと感ぜられる。ときには、このような割り切りに過剰に適応できることと数学が得意だということが混同されているような気がする。抽象度と形式性の増した大学数学において、形式的操作という数学イメージが通用しないというのは、言葉の上では矛盾した印象を受ける。しかし、抽象度と形式性が増すほどに、それを理解するための前提として、記号的表現の中に意味を読み取る力が重みをもってくるとのことなのである。

数学での初年次教育の重要なポイントはこのような数学イメージを壊すことである。だが、小中高と時間をかけて形成された数学イメージは強固であり、その破壊と転換に成功したと思えたことは残念ながら一度もない。おそらくは、大学以前の教育との連携抜きには不可能なことなのではないだろうか。また、問題は数学以前の日本語にもあるのではないかというのが、数学者がほぼ一様に抱いている意見でもある。話が大きくなるにつれて具体的対処法が見えなくなってきて困ってしまうのだが、専門分野によらぬ問題点として議論されるべきことなのかもしれない。

理学部教授

佐藤 文広 (さとう・ふみひろ)



編
集
後
記

本号では、ワークショップ、IR報告会・紫縁談義ともに「初年次教育」に関わるテーマとなりました。授業の観察、アンケートデータの分析結果、教員から見た学生の学び等、多様な側面から学生の成長過程の様子を垣間見ることができました。このような経験や知見の蓄積を今後の学修支援の取組みへと活かしていきたいと思っております。(御手洗)

「MOVE 第14号」

立教大学 大学教育開発・支援センター TL部会 ニューズレター
2014年9月25日発行

発行 立教大学 大学教育開発・支援センター TL部会
〒171-8501 東京都豊島区西池袋3-34-1
Tel: 03-3985-4623 Fax: 03-3985-4615
E-mail: cdshe@grp.rikkyo.ne.jp

<http://www.rikkyo.ac.jp/aboutus/philosophy/activism/CDSHE/>